

4. 聖霊のバプテスマによって、信者が「一つのからだ」とされる（I コリ 12：12～13）

(1) 12 節 ちょうど、からだ一つでも、多くの部分があり、からだの部分が多くても、一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。

- ① キリストのからだ＝普遍的教会は一つであるが、そこには異なったタイプのメンバーたち＝信者たちがいる。
- ② 異なったタイプがいるわけであるから、「からだ一つでも、多くの部分がある」ということになる。

(2) どういう点で異なるのか、前の 1 節から 11 節で語られている。それは、与えられている御霊の賜物の種類が違う、ということである。

- ① 御霊の賜物について、7 節、「**皆の益となるために、一人ひとりに御霊の現れが与えられているのです**」・・・「**皆の益**」、すなわち教会を建て上げるために与えられる。
- ② そして、それは「**御霊の現れ**」とあるように、現実に関心が見たり、聞いたりすることのできるものである。これは体験できることである。

(3) 13 節 a 私たちはみな、ユダヤ人もギリシア人も、奴隷も自由人も、**一つの御霊によってバプテスマを受けて**、一つのからだとなりました。

- ① 1 節から 12 節は、体験できることであつた。13 節では、その体験できることの前提として起きていたことを教える。それが、**聖霊のバプテスマ**である。聖霊のバプテスマ自体は、それが起きたときに何かを感じたり、体験するものではない。しかし、それがあって次に、御霊の現れとして、御霊の賜物を体験できる。
- ② 13 節が教えるのは、「私たちはみな」＝すべての信者が、聖霊のバプテスマを受けたということ。聖霊のバプテスマは一部の信者だけが受ける特別なものではない。聖霊のバプテスマは、すべての信者をメシアのからだを構成するメンバーとすることである。
- ③ よって、聖霊のバプテスマを、救われた後で何かを体験することのように教えるのは、誤りである。教会時代において、すべての信者は、例外なく、信じたときに、聖霊のバプテスマを受けた。何かを感じるとか、何か体験するというようなことは必要ない。

(4) 13 節 b **そして、みな一つの御霊を飲んだのです。**

- ① 私たち信者はみな、聖霊のバプテスマを受けて一つの御霊をシェアしている。
- ② 私たちはそれぞれが異なった賜物を与えられ、異なったタイプの信者である。
- ③ その違いがありながら、一致できるのは、一つの御霊によって一つのからだとされているからである。それぞれの部分がお互いに同じものではなくとも、お互いに必要とし、ともに組み合わせられて、ひとつのからだを形成している（I コリ 12 : 14～27）。

5. 聖霊のバプテスマと、信者がメシアに似た者とされていく聖化との 関係

- (1) 聖霊のバプテスマは、人が信じて救いを受けたとき、すなわち信者となったときに、1 回限り起きたこと、過去のことである。これに対して、聖化は、現在進行中の神のみわざである。救いを受けた信者が今をどのように生きるのか、という現在のこと、日々の生活に関係する。
- (2) 聖化の目標は、メシアに似た者となるということ。「メシアにある」という特別な地位をいただいている私たちは、その地位にふさわしく、その内側が変えられていく必要がある。それが聖化である。
- (3) では、聖霊のバプテスマは、聖化とどのような関係があるのか？ このテーマに最も関係する箇所は、ロマ 6 : 1～14。その文脈は、次のとおりである。
 - ① ロマ書 1 章から 5 章までは、罪の赦しをどのようにして受けるのか、ということをお話している。その解決は、神の義を信仰により受け取り、自分を義人として認めていただく、ということであった。これを神学上は、「義認」と呼ぶ。
 - ② ロマ書 6 章は、罪の力に対してどのようにして打ち勝っていくのか、ということである。その解決が「聖化」である。
 - ③ 義認を受けた信者が、聖化のプロセスに歩みを進めるときに、特に重要なことは、「恵み」である。私たちは聖化を願うほどに、自分がいかに弱く汚れた者であるかに気付き、圧倒される。そのとき、ロマ 5 : 20～21 に勇気づけられる。

「しかし、罪が増し加わるところに、恵みも満ちあふれました。それは、罪が死によって支配したように、恵みもまた義によって支配して、私たちの主イエス・キリストにより永遠のいのちに導くためなのです。」

→ 義認が神の恵みであったように、聖化もまた、神の恵みである。私たちの自分の力や行いによるのではない。そして、聖化の恵みをもたらしてくださる源は、聖霊である。

以上の文脈を念頭において、ロマ 6 章 1～14 節を読む。

(4) ロマ 6 章 1～14 節

① ロマ 6：1 質問

それでは、どのように言うべきでしょうか。恵みが増し加わるために、私たちは罪にとどまるべきでしょうか。

② ロマ 6：2 その答え

決してそんなことはありません。罪の中に死んだ私たちが、どうしてなおも罪のうちに生きていられるでしょうか。

③ ロマ 6：3～10 その説明 6つのポイント

- 3 節 信者はみな、聖霊のバプテスマによってキリストの死にあずかった
それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたのではありませんか。
- 4 節 そしてキリストとともに葬られた。それは、新しいいのちの中で信者が歩むためである
私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、【ちょうどキリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように】、私たちも、新しいいのちに歩むためです。 【 】の部分は、次の 5 節の内容とつながるので、そちらに
➤ 新しいいのちとは、信じたときに与えられた新しい性質。信者がこの新しいいのちの中で歩むためには、聖霊の助けが必要である。さらに、聖霊の助けがあれば信者がひとりだけで歩けるというものではない。教会のメンバーとされ、キリストのからだにつながってこそ、可能となる。聖霊のバプテスマは、信者をキリストのからだにつなげ、新しい性質に歩むことができるようにする。
- 5 節 信者が新しいいのちに歩むことは、霊的復活である
【それは、ちょうどキリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、です。】 私たちがキリストの死と同じようになって、キリストと一つになっているなら、キリストの復活とも同じようになるからです。

- 波線部は未来形であるが、死と葬りに同じになれば、霊的復活をすることになるという論理的順序を説明するための未来形。この箇所は、未来に起きる体の復活を指しているのではない。
- 6 節 信者の「古い人」と「罪のからだ」は、キリストとともに十字架につけられた
 私たちは知っています。私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減ばされて、私たちがもはや罪の奴隷ではなくなるためです。
 - 「古い人」＝罪の性質そのもの。また、罪の性質によって支配されていたときの人を指す。
 - 「罪のからだ」＝罪の性質によって支配され、罪を犯す道具とされている体
- 7 節 信者はキリストとともに死んだのだから、もはや罪を問われない死んだ者は、罪から解放されているのです。
- 8～10 節 信者は一度罪に対して死に、今は神に対して生きている
 私たちがキリストとともに死んだのなら、キリストとともに生きることにもなると、私たちは信じています。
 私たちは知っています。キリストは死者の中からよみがえって、もはや死ぬことはありません。死はもはやキリストを支配しないのです。なぜなら、キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、キリストが生きておられるのは、神に対して生きておられるのだからです。
 - キリストとともに死んだのなら、キリストとともに生きることになる。
 - キリストが死なれたのは一度であり、それも罪に対して死なれた、それと同様に、私たち信者も、一度罪に対して死んだ。
 - そして、キリストが今は神に対して生きておられるのと同様、私たち信者も、神に対して生きる。
- ④ ロマ 6：11～14 信者の 4 つの責任
 - 11 節 思考との関係において、みなし続ける
 同じように、あなたがたもキリスト・イエスにあって、自分は罪に対して死んだ者であり、神に対して生きている者だと、認めなさい。
 - 12 節～13 節 a 体との関係において、罪の性質の道具としない
 ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪に支配させて、からだの欲望に従ってはいけません。また、あなたがたの手足を不義の道具として

罪にささげてはいけません。

- 13 節 b 実践との関係において、自分をささげる、ゆだねる
むしろ、死者の中から生かされた者としてあなたがた自身を神にささげ、
また、あなたがたの手足を義の道具として神にささげなさい。
- 14 節 聖書の教えの上に立つ。私たちは、罪の性質に支配されていない。
私たちは恵みのもとにある、このことを信じる
罪があなたがたを支配することはないからです。あなたがたは、律法の
下ではなく、恵みの下にあるのです。

6. 聖霊のバプテスマと霊的祝福との関係

- (1) 私たち信者は、信じて救われたときに、全員が聖霊のバプテスマを受けて「キリストにある」という地位を受けている。このことと、父なる神からの霊的祝福とはどのような関係にあるのか？ 特に関係する箇所は、エペソ 1:3 である。
- (2) エペソ 1:3 二つのポイントがある
私たちの主イエス・キリストの父である神がほめたたえられますように。神はキリストにあって、天上にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。
 - ① 私たち信者は、キリストにあって、すでに祝福を所有している。
 - ② 私たちは神に祝福を求めて断食祈祷することも、献金することも必要ない。
すでに与えられているからである。私たち信者がその祝福を用いることができるかどうか、その祝福を経験的に楽しむことができるかどうか、それはただ、神に従うかどうか、信者の生活ルールに従うかどうか、それだけにかかっている。